



人とともに 地域とともに
国立大学法人
島根大学

資料集

古代 出雲 IX 文化フォーラム

Forum on Ancient Izumo Culture 古代出雲から中世へ
～日本海を動く人とモノ～

●シンポジウム資料集

目次

- | | |
|---|--------------------|
| 講演① 日本海を往来する海商たち | 1 |
| 講師 <small>よし</small> 吉 <small>なが</small> 永 <small>たけ</small> 壮 <small>し</small> 志 | 島根県教育庁文化財課 企画員 |
| 講演② 中世西日本海水運の展開 | 3 |
| 講師 <small>は</small> 長 <small>せ</small> 谷 <small>かわ</small> 川 <small>ひろ</small> 博 <small>し</small> 史 | 島根大学教育学部社会科教育専攻 教授 |
| 講演③ 日本海を動いたモノ —貿易陶磁器を中心として— | 5 |
| 講師 <small>もり</small> 守 <small>おか</small> 岡 <small>しょう</small> 正 <small>じ</small> 司 | 島根県立古代出雲歴史博物館 調整監 |



日本海を往来する海商たち

島根県教育庁文化財課 企画員 吉永 壮志

はじめに

古代から中世にかけて、海外との窓口として大宰鴻臚館や博多が大きな役割を担っていたのは間違いない。海外からの人々の来訪や日本から海外への出発を記した多くの文字資料、出土した大量の貿易陶磁器などの「唐物」の存在がそれを裏づける。一方、日本海地域、とりわけその西部にあたる山陰地域においては、海上交通を物語る文字資料が少ないこと、古代の海上交通が低調であったという理解から、顧みられることはほとんどない。しかし、例えば『出雲国風土記』の「国引き神話」に「栲衾志羅紀の三埼を國の餘有りやと見れば、國の餘有り」と詔りたまひて、童女の曾鉏取らして、大魚のきだ衝き別けて、はたすすき穂振り別けて、三身の綱打ち掛けて、霜黒葛くるやくるやに、河船のもそもそろに、國々来々と引き来縫ひたまひし國は、去豆の折絶よりして、八穂米支豆支の御埼なり」とあるように、朝鮮半島と日本海地域にある出雲との交流がうかがえ、さらに「国引き神話」には古志（越）＝北陸地方も登場し、越と出雲との交流をうかがわせる。

そこで、古代（古代から中世の過渡期である平安時代）の日本海地域、特に日本海西部に焦点をあて、海上交通による交流の様相を概観する。その際、文字資料を主として検討するが、そのなかでも海の商人である「海商」にかかわるものを中心に提起し、以下述べることにする。

1. 日本海地域の地理的特性

- 日本海を介して朝鮮半島と近い
→ 季節風を利用し、比較的短期間で航海が可能
- 瀬戸内地域と比べて島や岩礁が入り組んでおらず、海流が複雑ではない
→ 航海の安全性が高い
- 干満差が小さく砂州が発達しやすいため、太平洋地域と比べてラグーンが多く存在
ex 天橋立と阿蘇海、弓ヶ浜と中海・宍道湖（入海）、菌の長浜と神西湖（神門水海）
- ラグーンは
 - ① 手頃な水深で外海からの風波を避けられる
 - ② 水底が砂や泥で構成され、船の破損を避けられる
 - ③ 潮の干満を利用した出入りがしやすい

という利点がある

→ 港として優れている

⇒ 日本海地域は海上交通を行うのに適した環境



主なラグーン
（『入り海の記憶—知られざる出雲の面影—』
所収図を一部改変）

2. 渤海使による日本海地域来着

- *渤海使：中国東北部・朝鮮半島北部に成立した渤海（698～926）から派遣された使者
唐や新羅との関係悪化に伴い、友好関係を結ぶため、日本に派遣された
but 唐との関係が改善した 8 世紀後半以降は、貿易が主目的となる
右大臣藤原緒嗣の認識「渤海客徒…實に是れ商旅にして隣客とするに足らず」
（『類聚国史』巻194、天長 3 年（826） 3 月戊辰朔条）
- 9 世紀以降、朝鮮半島を支配していた新羅の弱体化により、鬱陵島が新羅の支配から離脱し、島伝い航路で渤海使の派遣が可能となる
→山陰地域を含む日本海西部に渤海使が来着し、そこで「商旅」たる渤海使と交流
ex 弘仁 5 年（814）秋に出雲に来着した王孝廉、出雲で漢詩のやりとり（『文華秀麗集』）
貞観 3 年（861）正月に隠岐・出雲に来着した李居正、出雲で供給（『日本三代実録』）

3. 新羅・宋の「海商」による日本海地域来着

- *新羅：朝鮮半島東南部に成立した国で、7 世紀後半に百済・高句麗を滅ぼし朝鮮半島統一
- 9 世紀半ば以降、大宰府での交易を唐の商人が担うようになり、日本海西部に来着
ex 貞観 5 年（863）に「略商人に似る」新羅人 57 名、因幡国荒坂浜に来着
（『日本三代実録』同年 11 月 17 日条）
同年に新羅人 30 余名、石見国美濃郡に来着（『日本三代実録』貞観 6 年 2 月 17 日条）
寛平 2 年（890）10 月に新羅人 35 名、隠岐に来着（『日本紀略』寛平 3 年 2 月 26 日条）
- 貞観 8 年（866）、新羅人と前隠岐守との共謀について隠岐国浪人安曇福雄が密告
ただし誣告（『日本三代実録』貞観 11 年 10 月 26 日条）
→日本海西部における新羅人との交流
- *宋：後周の後をうけ中国に成立した国で、東アジア海域で海上交易を盛んに行う
- 大宰府で管理貿易が実施されるものの、日本海西部にも来着し活動
ex 長久 5 年（1044）に大宋国商客張守隆、但馬国に来着（『百練抄』同年 7 月 27 日条）
寛治 3 年（1089）「若狭〔宋〕大宗国商人」の存在（『後二条師通記』同年 3 月 18 日条）
元永 2 年（1119）頃「敦賀唐人」の存在（東寺観智院旧蔵『唐大和尚東征伝』紙背文書）
→日本海西部を往来し、皇族や貴族のいる京に近い若狭や越前敦賀で活動する「海商」

4. 日本海地域における隠岐

- 「商賈之輩」が漂流すると「火光」で導く（『日本後紀』延暦 18 年（799）5 月丙辰条）
→「海商」にとって日本海西部のランドマークとして機能
- 「私貿易」として海産物を求め来往（『別聚符宣抄』天慶 9 年（946）3 月 13 日太政官符）
→国内の「海商」が貿易を行う場として機能

結びにかえて—古代の日本海地域—

国内外の「海商」たちが往来する→海上交通を通じ先進の文物・情報がもたらされる地域

中世西日本海水運の展開

島根大学教育学部社会科教育専攻 教授 長谷川 博 史

はじめに

『古事談』（13世紀初期の説話集）

昔、近江国（現在の滋賀県）に粟津冠者という武勇の者がいて、一堂を建立し、鐘を鑄造するため、鉄を求めて海路で出雲国へ向かった。嵐にあったが童子の乗る小舟に救われて龍宮へ導かれ、大蛇を倒した御礼に龍宮寺の鐘を持ち帰った。

- 古代の日本海 陸路を基軸とした律令国家の交通体系による制約
天候や和船の技術的発達段階による制約
- 中世の日本海 廻船が広く展開する時代
大陸との交流が、規模と頻度において大きく拡大
⇒西日本海は、近世初頭に向けて活発で多彩な物流・交流の舞台へと変貌

1. 博多と小浜 <11世紀～>

- 博多 11c半 貿易拠点が鴻臚館から博多唐房（宋海商の居留地）へ（山内2013）
12c半 唐房の解消 →博多のさらなる発展+日本海沿岸部の流通（榎本2014）
⇒沖手遺跡・中須東原遺跡（益田市教委2009・2013）
11c後半～ 多量の貿易陶磁の出土 12c～ 港湾・物流拠点の集落形成
- 小浜 万寿元年（1024）伯耆国租税積載船が若狭国に着岸（錦織2013）
⇒11～12c 荘園公領制下の基幹的交通手段として中世西日本海水運が成立（井上1991）

2. 廻船の隆盛 <13世紀～>

- 宝治2年（1248）蔵人所牒案（「阿蘇品文書」）
鑄物師廻船の寄港地として、「美保関」が史料上にはじめてあらわれる（網野1984）
- 正嘉2年（1258）「伯耆国河村郡東郷荘下地中分絵図」に描かれた日本海の帆船
- 13c半～14c半 御影石製と思われる石造物が石見国内に多数現存
- 14c半～15c半 日引石製と思われる石造物が広域的に流通
五島列島や薩摩半島、北東日本海域に至る広範囲に現存 商品として製品を運送
- 応永19年（1412）若狭國小浜に着岸する「鉄船」に懸ける公事 内裏直納を命じる
- 文明2年（1470）出雲国守護京極持清書状（「佐々木文書」）

隠州所々廻舟、美保関役の事、その沙汰を致さざる舟に至りては、先々の如く、若州小浜において、懸沙汰あるべく候、関役難洪候わば、一段成敗あるべく候也、恐々謹言、

文明貳

四月廿六日

(清貞)
尼子刑部少輔殿

(京極持清)

生観（花押）

3. 海域の活況 <14世紀～>

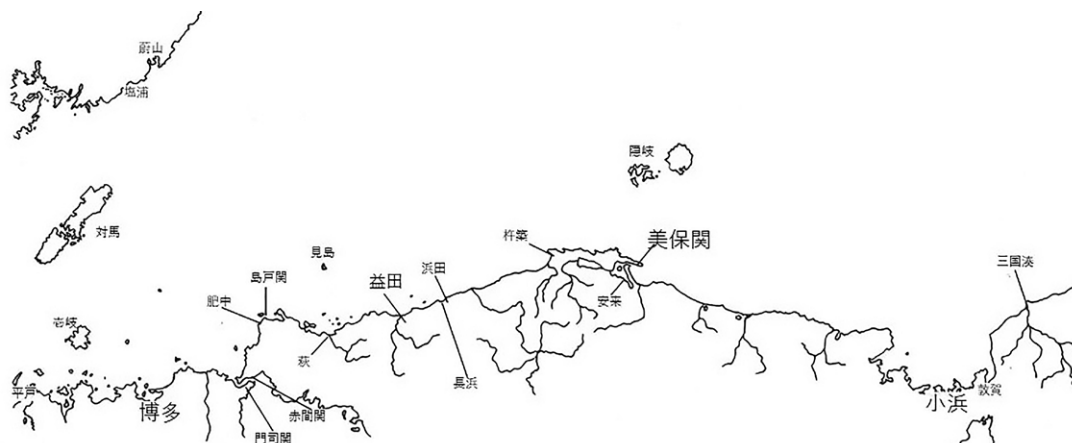
- 14c半～16c 中須東原遺跡・中須西原遺跡（益田市） 多量の貿易陶磁が出土
- 貞治5年（1366） 倭寇禁圧を求める高麗使節の金竜が出雲国杵築に着岸
- 応永15年（1408）・応永19年 若狭国小浜に南蛮船が着岸・滞在・船破損・船新造
重烈進卿（スマトラ島パレンバンの華僑頭目）が派遣
- 応永27年（1420） 出雲国安来に70余戸の朝鮮人町（『世宗実録』巻7）
- 応永32年（1425） 茂陵等處安撫使の一艘が石見国長浜（浜田市）に漂着
これを契機に石見国周布氏の朝鮮通交が始まる（『朝鮮王朝実録』『海東諸国紀』）
- 世宗18年（1436） 蔚山に漂着した対馬の倭人太郎左衛門
商売のため石見国に向かう途中漂流したと説明（『世宗実録』巻72）
- 端宗3年（1455） 石見国出身の「三甫羅酒毛」
対馬にて還俗し、朝鮮人と詐称して朝鮮で回賜品を盗む（『端宗実録』巻13）
- 寛正5年（1464） 「雲州海賊」が明に侵入して小児を略奪（『臥雲日件録抜尤』）
- 成宗12年（1481） 全羅道を襲撃した「倭賊」22人
対馬に居住して石見国との商売を生業としていた（『成宗実録』巻132）

⇒海賊行為を含む西日本海西部海域における海上勢力の諸活動は、公的な通交システムとは別に存在するとともに、公的な通交の展開によってさらに活動が活発化

⇒船舶構造・規模の変化（構造船）→港湾機能の差別化 →拠点の港湾都市の形成

おわりに

- 中世の西日本海は、1～3が折り重なって、海域全体の交流・物流が深められていった
- この後16世紀後半は、石見産銀の輸出がもたらした海域の変動により、別世界の様相
- 中世西日本海が島根半島周辺を重要な拠点として発展していったことは、交流のあり方に大きな差異がみられるとはいえ、古代以来の出雲国周辺が独自の位置を占めてきた地理的条件の特徴をうかがわせている



参考文献

- 網野善彦『日本中世の非農業民と天皇』（岩波書店、1984年）
井上寛司「中世西日本海地域の水運と交流」（『日本海と出雲世界』小学館、1991年）
益田市教育委員会『沖手遺跡』（2010年）・『中須東原遺跡』（2013年）
錦織勤『鳥取県史ブックレット12 古代中世の因伯の交通』（鳥取県、2013年）
長谷川博史『松江市ふるさと文庫15 中世水運と松江』（松江市、2013年）
山内晋次「日宋貿易と「トウボウ」をめぐる覚書」（『寧波と博多』汲古書院、2013年）
榎本渉「宋元交替と日本」（『岩波講座日本歴史7 中世2』岩波書店、2014年）

日本海を動いたモノ ―貿易陶磁器を中心として―

島根県立古代出雲歴史博物館 調整監 守岡正司

出雲は古代以来、日本海交易の拠点の1つと言われている。弥生時代や古墳時代のモノの動きについて、調査研究は盛んで、また、出雲では『出雲国風土記』があり、文献史学を含め古代の調査研究も進められている。一方、古代から中世にかけての社会は大きく変化しているが、島根県では、この変革期の考古学的な調査研究は少ない。今回、人やモノの動きについて、特に貿易陶磁器の出土状況について概観したい。

1. 貿易陶磁器とは

ここでの貿易陶磁器とは、中国大陸や朝鮮半島で生産され、中世日本に持ち込まれた陶磁器としたい。代表的な陶磁器として白磁や青磁等があり、時代により窯跡や形状が変化している。貿易陶磁器の特徴としては、生産窯がわかる場合があり、生産地と消費地を結びつけることができる。中継地である港や市場を経由し、最終的には館跡や役所跡で消費される。また、貿易陶磁器は、日本だけでなく、中国大陸や東南アジア、西アジア等でも出土し、同じ形態の陶磁器が広域に流通しており、各地域で陶磁器の中で受け入れたモノ、受け入れなかったモノがあり、好みや流行なども知ることができる。

2. 各時代の様相

① 9世紀頃から10世紀

貿易陶磁器は、すでに9世紀頃から日本にもたらされ、それらは初期貿易陶磁器と呼ばれている。島根県では、越州窯系青磁、長沙窯系青磁、白磁(定窯・邢窯)が確認されている。出土遺跡は限られ、松江市出雲国府跡・天満谷遺跡・大屋敷遺跡、浜田市古市遺跡・横路遺跡などから出土している。

② 11世紀後半から12世紀中頃

この時期、急激に貿易陶磁器の出土量や出土遺跡が増加する。当時の貿易港である博多遺跡群からは多種多様で大量の陶磁器が出土している。島根県では、日本に運ばれてきた陶磁器の内、限られた中国製の白磁や甕などの陶器のほか、初期高麗青磁と呼ばれる朝鮮半島で生産された陶磁器も確認されている。出土遺跡は増加するが、1点から数点の破片のみしか出土しない例がほとんどで、まとまって出土する遺跡は、前述の松江市出雲国府跡、浜田市古市遺跡・横路遺跡のほか、出雲市青木遺跡、益田市沖手遺跡などに限られる。

③ 12世紀後半から13世紀前半

前代の白磁中心の時代から青磁中心の時代に変化する。島根県では内面に文様を付けた龍泉窯系青磁や外面に櫛描き文がある「同安窯系青磁」と呼ばれる青磁が確認され、前代の白磁も一定量残存している。前述した遺跡からは引き続き出土するが、出土量が増える遺跡と減る遺跡がある。

④ 13世紀後半以降

外面に蓮弁文が施された龍泉窯系青磁や口禿と呼ばれる白磁が確認される。島根県では、この時期の陶磁器が出土する遺跡はあるが、出土量が多い遺跡は限られる。

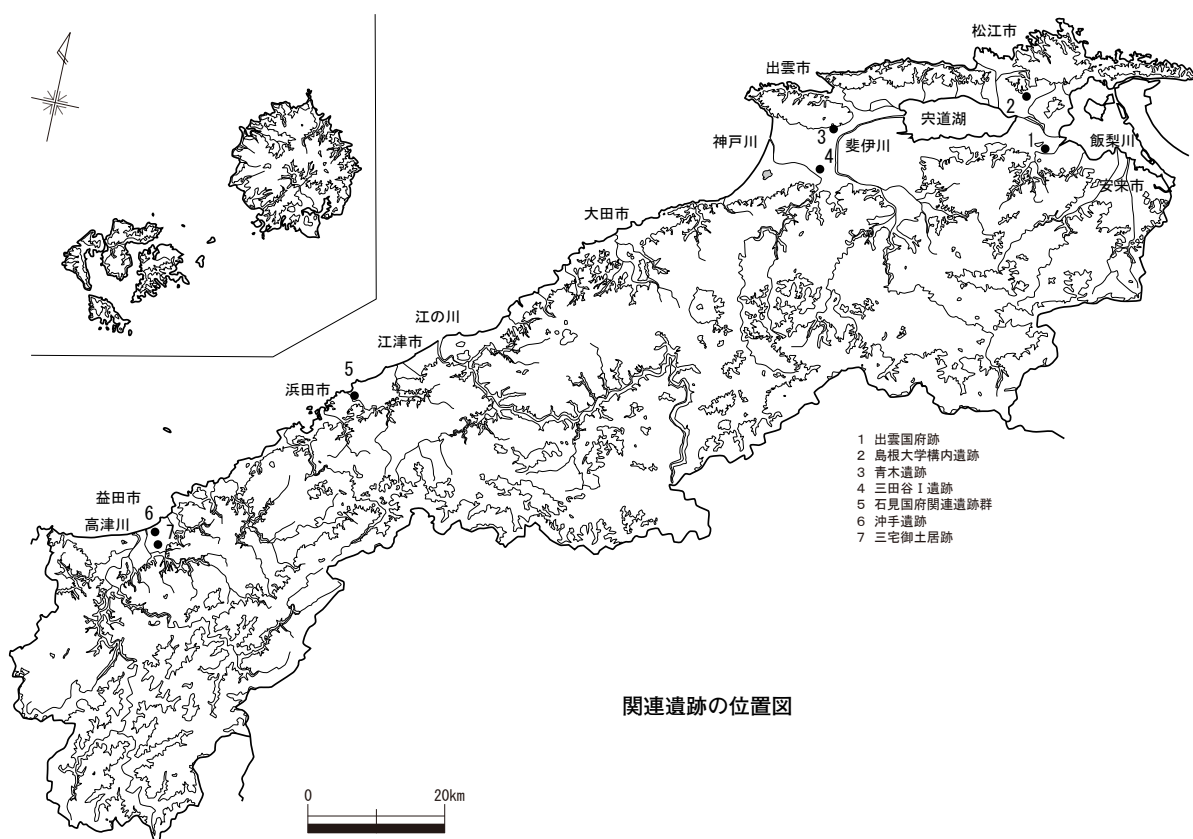
3. 出雲地域の様相

古代の国府である松江市出雲国府跡周辺、古代の役所や宗教関連遺跡と考えられている出雲市青木遺跡や三田谷Ⅰ遺跡からは初期貿易陶磁器をはじめ、各時代の貿易陶磁器がまとまって出土している。出土量や種類に関して詳細に検討すると、出雲国府跡では博多遺跡群と同様に多種類があり、他の遺跡とは様相が異なる。出土数量だけでなく、出土する種類の多さにも遺跡の性格などが現れている。

4. 石見地域の様相

古代の国府である浜田市石見国府関連遺跡群（古市遺跡・横路遺跡など）からは初期貿易陶磁器をはじめ、各時代の貿易陶磁器がまとまって出土している。初期貿易陶磁器は出土するが、11世紀後半以降の貿易陶磁器は出土しない遺跡がある一方、益田市沖手遺跡など、11世紀後半から13世紀前半の貿易陶磁器が大量に出土する遺跡が出現する。社会の変化の一端を現している可能性がある。

古代末から中世にかけては、貿易陶磁器だけでなく、国内各地で生産されたモノが出雲にもたらされている。資料の少ない地域であるが、モノの動きから人や情報の行き交った世界の一部を考えることができる。



参考文献

- 山本信夫・山本麻里子 2007 「山陰の出土貿易陶磁と傾向」『下関市文化財調査報告書 25』
橋本久和 2017 「中世前期の貿易陶磁器研究」『第35回中世土器研究会—貿易陶磁研究の現状と土器研究—』
山本信夫 2017 「大宰府出土貿易陶磁器編年」『第35回中世土器研究会—貿易陶磁研究の現状と土器研究—』
廣江耕史 2021 「陶磁器流通と港湾施設の観点から—山陰地域の状況を中心に—」『古代史交通研究会第21回大会資料集』

古代
出雲
IX
文化フォーラム
古代出雲から中世へ
Forum on Ancient Izumo Culture ~日本海を動く人とモノ~



人とともに 地域とともに
国立大学法人
島根大学